

箱根の山の、一分八秒

佐々木幹雄（東京都大田区・五十六歳）

父さん、あなたが箱根駅伝の選手として、登りの五区の選手として、二年続けて走った日のことを、私は一度も聞いたことがありませんでした。今ほど駅伝が注目されていなかったとはいえ、父さんの誇りだった箱根の激走を、息子に一度も聞かれなかったのは、淋しいことだよ。息子は著しく運動が苦手で、選手になるなど論外だったけど、それよりも、話題にしてもらえなかったことの方が悲しいよね。今さら遅すぎるのは、よくわかってる。

父さんの四十九日の数日後、仕事で箱根に行きました。「俺の走った場所を、ちゃんと見てみるよ」と連れて来てくれたのかな。車を降りて、五区の信じられないほど急な坂道を歩いたら、後悔という言葉が頭に浮かびました。でも、父さんがいなくなったことを悲しんで、僕が泣いたのは、「数字」を見た瞬間だったんだ。昭和二十三年の一時四十九分二十秒と、昭和二十四年の一時四十八分十二秒。一分八秒記録が縮んでいました。

このわずかな時間を縮めるために、父さんがどれだけの苦勞をしたかを考えると、止めどもなく涙が溢れました。数字を見て大泣きする男なんて、おかしいよね。

十年後にそちらに追いかけてった、母さんが言ったよ。「父さんは、生活に追われてアルバイトに明け暮れていなければ、オリンピックにだって出られた人だった」と。叔父さんにも話を聞いたし、色々調べてみたんだ。

柏原(かしわばら)竜二(りゅうじ)の記録より三十分以上遅いけど、父さんの代わりに、現代の選手達に言ってるぞ。君達も、うちの親父のボロ靴で走ってみろよ。前の選手がいつ来るかの情報がない中、極寒の中を待ち続けてみるよ。大会の直前までアルバイト、それも肉体作業してみろよ。一年中腹一杯食べられない生活してみろよ。選手不足で短距離の競技にもかり出さず、全力疾走を試してみろよ。戦争に召集され、身体も心も傷ついて還ってきて、もう一度気持ちを奮い立たせて走ってみろよ。

そんな中で、二年続けて五区を走り、六十八秒記録を縮めた親父を誇りに思うぞ、文句あるかと。

でも、これらの言葉は、僕自身にも突き刺さるんだ。父さんが縮めた「一分八秒」に値するものを、これからの人生で成し遂げることができ、それを子供達に伝えられるんだろうか。

父さん、見えない襷(たすき)は確かに受け取ったよ。これから「一分八秒」を目指して、ひと踏ん張り頑張ってみる。だから、駅伝のことを尋ねなかった僕を、許してくれるかい？ 風に耳を傾ければ答えてくれる？ ねえ、父さん……。